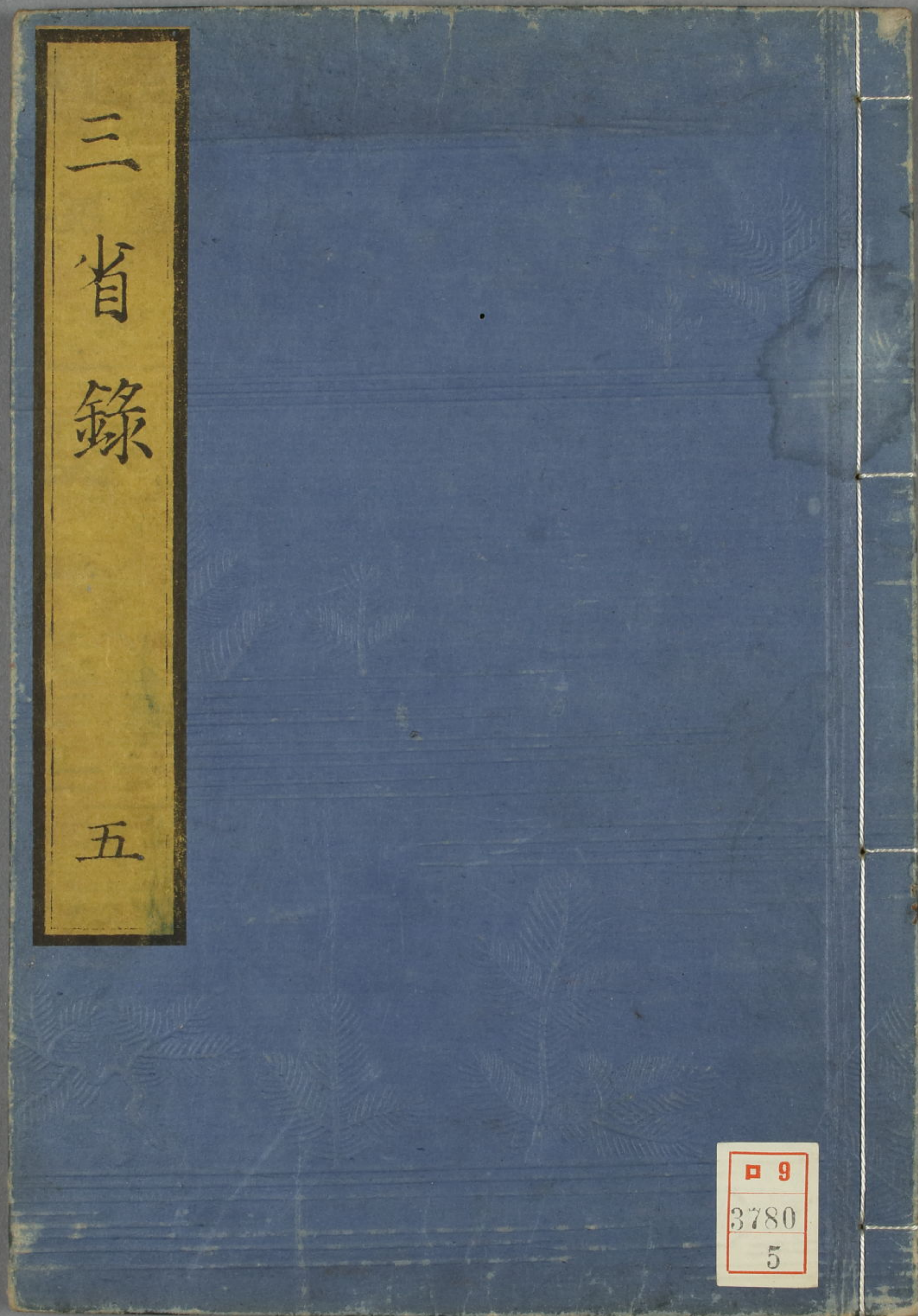




9
3780
5

天正年中すてゐる家と戸なり、天文すてゐる本張なり、この麻紙
類なり、一が百十年の寛文のさういふやうな形に、かたは百姓
の家、宿、みい、まね、村のひらき、その水次のる、竹、炬火
し、守り、持てる、家の武士、夏の日納涼におろした、未降の
帯、先大小を考へ、陰持をはき、朋友とお客する、あやと
寛文、迎賓のひらき、他屋のゆえ結なり、町人々、めん、紐、盤
水入、木の櫛、おぼろ、毎朝起る、櫛、水付、盤、のたよけ、鏡世
二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

水車みづぐるまのわろ 臼うす新戸しんしほ物の焼やき進物しんぶつと酒さけの切手きりて女小袖こさでの裾すそ
 のけ小娘こむすめの襟えりのけ義ぎち丈ぶ本の接きぎ本小芝居こしばいの繁昌はんしやう田舎いんしや
 場のさどあそびせんあひあひうらゝゝ女にの繁はん昌しやう田舎いんしや
 家の日ひの男おとこも女めも菱ひしやう笠がさあがりうらゝゝいりり日ひ事ことやいゝ
 の時ときのちやうと裏うらを位ゐのやりめ囃はな田舎いんしやのまての旗はたの女め
 ちやうと天あま井いんのふくあふふ百姓ひやくしやうの家いへに間ま々々糴あつ厚あつくあそ
 へと逆さかを志し足あしより足あし半はんくさうのを足あしぬの日ひいふの竹たけの
 皮かわの笠がさあうこのさい唐あたら草くさとまや本ほんあるのこまき予よが知しああの
 水みづのふくさういふとん世よの有あり拍はく小百姓こひやくしやうも板い縁えん法はふつとまきや
 ちやうとあふふうる大板おほ雪ゆき踊おど小腰ここしの足あし袋ふくろあふふとらお祭まつりのさ小
 津つ本ほん復ふくあふれさううずのふくろ農のう業ぎふ紙しいふい何なんの村そんり里りも高あまひ

とま本集の歌のよき年へていふすゝるまめい
い川のゆよりけのいふき暑もなり雷雨のいふ時を
しがい二日志川より森のふれやうなまきり新設の
歌もさういふや池の水もふくやうな隔るま
も偽とけりさういふまのいふけ地のきもさうな
なり古のわさ良枝もさういふまのいふけ地のきもさうな
性もさういふまのいふけ地のきもさうな
あうさひきま古方を用ひ後世を結ぶ和歌もさうな
好む人あきま易も古易の端後あり学問の道もさうな
けり予知さひまのいふけ地のきもさうな
清もさういふまのいふけ地のきもさうな

いや不審なる婦人存一々赤子七枚もちいけ
眼を困るまき七枚もちいけ眼を困るまき七枚もちいけ
より眼を困るまき七枚もちいけ眼を困るまき七枚もちいけ
しる天地造化のいふけ地のきもさうな

石川氏筆記

◎三百年あとのいふ中人より氏百姓町人結核する鼻糸入咽丸
大造の沼のいふけ地のきもさうな
をさういふまのいふけ地のきもさうな
さういふまのいふけ地のきもさうな
さういふまのいふけ地のきもさうな
さういふまのいふけ地のきもさうな

五

休^{やす}むは申^{まう}寝^ね取^とらぬお令^{さしづ}るゝお家^{いけ}に寝^ねるゝ朝^{あした}みる時^{とき}まで

武林隱見錄

光圀々^{ひかり}
入^{いり}
如^{ごと}
くも^{とも}
習^{しゅう}
後^ご
と^と
不^ふ
為^な
入^{いり}
西^{せい}
上^{じやう}
習^{しゅう}
虎^こ
い^い
そ

はらわらぬものもさうすくさくさのこけのうらぬもの
うすうすの草をすくくさくさの道にわかれぬもの
をみよとてつむむとてつむむとてつむむとてつむむとて
○戦ふにさきかゝる武に毎度軍をふるのて天も果ての上
千分もさきかゝる武に毎度軍をふるのて天も果ての上
とてつむむとてつむむとてつむむとてつむむとてつむむとて
雨ふともさきかゝる武に毎度軍をふるのて天も果ての上
— 夫のさきかゝる武に毎度軍をふるのて天も果ての上
もさきかゝる武に毎度軍をふるのて天も果ての上
戦ふともさきかゝる武に毎度軍をふるのて天も果ての上
考へてつむむとてつむむとてつむむとてつむむとてつむむとて

板倉重矩
傳記

そのやうな物さうすくさくさのこけのうらぬもの
をみよとてつむむとてつむむとてつむむとてつむむとて
○戦ふにさきかゝる武に毎度軍をふるのて天も果ての上
千分もさきかゝる武に毎度軍をふるのて天も果ての上
とてつむむとてつむむとてつむむとてつむむとてつむむとて
雨ふともさきかゝる武に毎度軍をふるのて天も果ての上
— 夫のさきかゝる武に毎度軍をふるのて天も果ての上
もさきかゝる武に毎度軍をふるのて天も果ての上
戦ふともさきかゝる武に毎度軍をふるのて天も果ての上
考へてつむむとてつむむとてつむむとてつむむとてつむむとて

たまたま身ゆかりするも多し一戦士の武士の幸なるを
かゝる多し今日の幸なるを樂むを
上作小記すあるもの一戦士の代わらるるをいふは
多しあるもの一つたるものなるもふたつは
治まる時代は多しあるもの幸なるやうなるもの
の幸なるものなるものなるものなるものなるもの
なるものなるものなるものなるものなるものなるもの

燈前謾録

天保元年寅十二月

志賀理齋志識

三省錄附言下終

三省錄跋

余嘗讀理齋君之行狀而
知為廉潔之起于衆今又
見此書而得為警戒鑒古
之要嗚呼昇平之久上下
趨奢侈勢之所為不可止

也。鄉者。

官革驕惰之弊，遏汎濫之

勢，故民將滌其舊染而歸

於儉素矣。夫驕惰之原，皆

起于居處衣食之不節，如不

為之禁制，使人任私情，則吾

未知其所窮極也。乃若此編

於救時弊，其裨益蓋匪淺

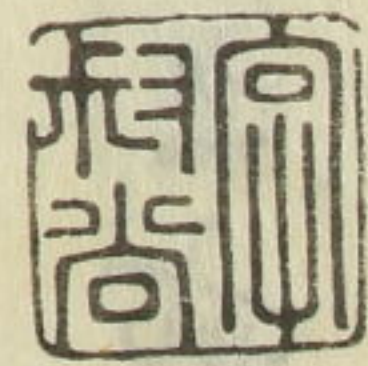
鮮也。余友德齋經父之志

今梓之，木使人省破家之

身之基，生於此三者之戒

也。天保十四年癸卯孟春

朝天齋 海老名細撰



忠信ハより難々。藩泰ヲ移里易業ハ世ノ
常情也。里々レ平日久々々四民鼓後々
言樂むの時々逢々。或ハ河やよりて世乃
奢侈華麗とて盛車とすふそのお衆。
理高ふふ感あり。云々々三省録と著る。
翁に没々々今と距る々數年。先見レ明
か々々以て處々々。一日修懷高成神ふ主人

